長野県近代史研究会編・上條宏之監修
『長野県近代民衆史の諸問題』（龍鳳書房、二〇〇八年）

タカクラ・テルの一九二〇年代

―タカクラにおける「民衆」の発見―

山野　晴雄

はじめに

タカクラ・テルについては、これまで、大正デモクラシー期の自由大学運動[1]や昭和初期の長野県における農民運動[2]との関わりで、また、戦時下の転向との関連[3]で取り上げられてきた。タカクラが知識人のひとりとして生きた生涯を考えるとき、自由大学運動に関わったことが、その後の農民運動の指導、戦時下の「標準日本語」の創出、「国民文学」の確立、農民共同組合の提唱に関する発言、戦後の政治・文化活動に影響を与えたが、とくに自由大学運動を通して「民衆」を発見したことが、タカクラの生涯に大きな影響を与えたと考えられる。

本稿の目的は、タカクラの評伝研究の中で、一九二〇年代にタカクラがどのように「民衆」を発見し、独自の思想を形成していったのかを跡づけることにある。

一　自由大学への出講

タカクラが、京都帝国大学のロシア語教室で知り合った在野の哲学者である土田杏村から自由大学への出講を誘われたのは、一九二一年六月のことである。タカクラは、一六年に京都帝国大学英文科を卒業後、法科国際私法研究室の嘱託となり、ロシア文学を研究するかたわら創作活動をすすめ、一九年には戯曲「砂丘」（『改造』第一巻第七号）を発表して本格的に作家としてデビューする。そして、指導教官の新村出が留学中の二一年、創作に専念するため、京都大学の嘱託をやめ、処女出版となる翻訳書『心の劇場』（京都内外出版社）を出版する。作家として生活する決心がかたまりつつあったころ、土田のすすめで自由大学運動に関わることになったのである。

自由大学は、長野県上田・小県地域で創造的に生きようとする金井正・山越脩蔵・猪坂直一という三人の青年たちと、新しい文化運動の実現に意欲を示していた土田杏村との人間的な交流の中から創り出されたものである。一九二一年八月に公表された「信濃自由大学趣意書」には、その設立の趣旨が「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が其の産業に従事しつゝ、自由に大学教育を受ける機会を得んが為めに、綜合長期の講座を開き、主として文化的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致します」と、述べられた。二一年十一月、信濃（のち上田）自由大学の第一回講座として恒藤恭の「法律哲学」が開講された。この自由大学の試みは地域の青年たちの学習の場として大きな役割を果たしていくことになる。

タカクラが初めて出講したのは、一九二一年十二月に上田市横町の神職合議所を会場に開講された信濃自由大学で、「文学論」を講義した。タカクラは講義に先立ち、自由大学の運営者に宛てて「御引きうけは致しましたものの私の話は他の哲学や社会問題の話のやうに御参考になるまいと存じまして大変気にかかって居る次第です。殊に仮に『文学論』と題はつけましたものの実は只今私が創作しようと志してる心持を偽らずに申し上げて見ようと思ひますので決して学術的に組織の立った話しでは有りませ

表1　タカクラ・テル自由大学出講一覧

開講年月日	日数	大学名	講　座　名	聴講者数	備　考
1921.12. 1	6	信濃	文学論	68	
1922.12. 3	1	信濃	文学講演		自由大学主催
12. 5	5	信濃	文学論	63	
1923. 1.		福島	文学論		
8. 6	3	魚沼	近代思潮論	約150	
8. 6	1	魚沼	恋愛と家庭		婦人のための講演
12. 1	5	信濃	文学論(ドストエフスキー研究)		
12.16	1	八海	文学概論		兼発会式講演
1924. 1.28	5	信南	文学論	52	
8.18	3	魚沼	文学論(ダンテ)	約100	
12.10	5	上田	文学論		
12.16	1	松本	自由大学に就て		発会式講演
1925. 1. 8	5	伊那	文学論(ダンテ研究)	26	
12. 1	5	上田	文学論(フランス文学)	30	
1926. 1.10	1	群馬	文学の成立に就いて	約150	発会式講演
2. 3	4	伊那	ダンテ研究(続講)	15	
2.23	4	群馬	文学論		
10.24	1	川口	文学論		
1927.10. 9	1	川口	文学論	約70	
1928. 3.14	3	上田	日本文学研究	60	
1928.12. 1	4	伊那	日本民族史		
1929.12. 6	4	上田	日本文学研究	28	
12.20	3	伊那	日本民族史研究		

＊1924年2月より信濃自由大学は上田自由大学に、信南自由大学は伊那自由大学に改称。
（山野晴雄作成）

んのです。只だ此の心持をまとめるだけは骨を折ってまとめたつもりでありますがどうか前以てその点を御含みを願ひ度いと存じます」と書き送っていたが、[4] タカクラの講義は好評であった。運営者の一人である猪坂直一は「氏の講義は講義と言ふよりは創作である、一言一句僕等に何か深い暗示を与へねば已まない。そ

して随分難解な講義であるが、僕等は知らず識らずズルズル引き込まれてしまふのである」と回想し、[5] 二二年十二月の「文学論」の聴講者の一人は「ゴーゴリの作品やらロシア革命の話でとても面白かった。始めての日のあの向きでは何んな事になるかと打ち案じられたのに」と日記に書いている。[6]

タカクラの「明るい磊落な人柄と博学」は聴講者の好評をはくし、やがてタカクラは「自由大学随一の人気講師」となる。[7]

タカクラは、長野県の上田や飯田など各地の自由大学で「文学論」を中心に講義し、自由大学の講師の中では最も多くの講義や講演を行った。その回数は上田自由大学の七回、伊那自由大学の五回など二三回に達している。[8] そして、タカクラは、この自由大学への出講をきっかけに信州の青年たちと結びつくようになるのである。

二　長野県への移住

一九二二年一月、タカクラの最初の戯曲集『三部曲　女人焚殺』（アルス）が出版された。これは『高倉輝著作集』第一輯として刊行されたが、ヒューマニズムをモチーフに人生の意味を深くとらえようとした作品である。土田は「其の一つの作許りに何箇月かの全生命を注ぎ込んで居た真剣さを、僕ほどよく知つて居たものは無いかと思ふ」とし、「其の全作を見て貰ひ、其の中に一のヒユマニテイーがどういふ風に強く表現させられて居るかを知つて貰ふことだ」と、この戯曲集を紹介している。[9] タカクラは、

「著者より読者へ」の中で、「とにも角にもこれが作者が漸く真剣に創作の生活に入らうとした最初の足跡でございます。これを第一歩にしてこれから出来るだけの為事を続けて行き度いと思つて居ります」と、これからの決意を書いている。[10]

タカクラは郷里の土佐で執筆活動をしていたが、その一方で信州に移住し、そこで執筆に専念しようという気持ちをいだくようになっていた。この年、タカクラが山越に書き送った数通の手紙には、筆が思うように進まない状況と体調の不良を表白するとともに、信州に移住したいとの気持ちを明らかにしている。二二年二月十一日付の手紙には「小生も信州へ参り度くて溜(ママ)まりません。自由大学の会員諸君にもお目にかかり度くて溜(ママ)まらぬ気がします」と書いていたが、二月二十六日付の手紙では「健康は全然こわしてるし、全くの死に者狂ひです。これ［自伝的小説「蒼空」のこと―引用者］が出来上るまでは一寸も動けません。従って御地行きも出来ません。非常に残念です」と、信州行きを断念したことを伝えている。それから一か月後、タカクラは信州で執筆することを決意し、星野温泉に家を借りることができるか、山越に依頼している。「もし今の作品が出来上がりましたら、事によると暫く信州へ行かうかと考へて居ります。……暫くそちらで次の作にかからうかとも考へて居ります。甚だ恐入りますが、もしお序も有りましたら例の星野温泉の別荘だかの家一軒都合がつきますまいかお聞き合はせ下さいますまいか」と。[11] しかし、体調を崩し、一旦、信州行きを断念する。そして、秋になり、苦しみ抜いて執筆した長編小説「蒼空」の原稿がほぼ完成し、安田津宇との結婚をひかえたタカクラは、今度こそ信州への移住を決意する。タカクラは九月に山越に書き送ったと思われる手紙の中で、「私は此月末に駆落的結婚をやります。同時に、今までやってもやっても失敗した昨年来の作品を最後の努力でやっつけて了

ふ積りです。で十月の初めから十一月末頃まで此前御手数をかけた例の星野温泉で……送り度いと思ひます。……何しろ将来は学海という信州へ移住し度いと思って居ります」と書き送っている。[12]

こうしてタカクラは、十月、長野県の星野温泉に移ってくる。十二月の信濃自由大学での「文学論」の講義が終わると、京都に行き、二十五日、京都四条の万葉軒で安田津宇との結婚式を挙げた。親族が集まって会食しただけの簡単な結婚式であったが、[13] 二人は長野県の沓掛に新居を構えた。

三「文壇」からのボイコット

タカクラの新居は星野温泉のある旅館の別荘で、そこでタカクラは創作と読書にふけっていたが、すぐに二人に、最初の生活難がやってきた。土田の世話で、長編小説「蒼空」を大阪のプラトン社の雑誌に連載することになり、原稿料の半分を受け取り、それを結婚の費用にあてていた。ところが、プラトン社は、急に、「都合で掲載できない」といって破約し、原稿を全部返してきた。このため、生活費にも事欠くようになったタカクラは、津宇が持参した着物を質に入れて、一時を凌ぐ状態となった。[14]

プラトン社が破約してきただけでなく、いくつかの雑誌社や出版社に依頼されていた原稿や出版も、すべて向こうから断ってくるようになった。タカクラが朝日新聞の記者から聞いた話によると、菊池寛を中心とする当時の文壇の連中が、「高倉の作品をのせようなら、おれたちは書かない」と言って、雑誌社をおどかしてきた、という。また、大阪毎日新聞の薄田泣菫が、これは、久米正雄・菊池寛・芥川

龍之介らの『新思潮』の一派が、文壇を独占するために、新しい作家が出てくるのを妨げたのだ、と書いているといわれる。とくにタカクラを文壇からボイコットさせるために菊池を動かしたのは芥川であった。[15]

一九二三年一月、タカクラは、土田に宛てた手紙の中で、「作早速かかる。出来てからどこへでも出す所考へる。新小説が突然変な態度をして意がいだったがやっと今分かった。あすこから菊池一派の雑誌が出た。滑稽奮闘奮闘」と書いているように、原稿掲載の妨害が菊池寛らの一派によることに気づいていた。これ以後、タカクラの作品は、単行本として、出版社のアルスから出ることになった。このことは、タカクラが、直接読者を意識して作品を執筆していく姿勢をとることになり、のちに大衆作家として生きていく契機の一つとなった。

四月に入ってタカクラは、星野温泉の上にある千ヶ滝の貸別荘へ移った。唐松の林を毎日のように散歩し、創作に専念していたが、その頃のことをこう書いている。「その頃、私は、生涯の迷い道に立っていた。どう生きたらよいかとゆう問題のために、非常に苦しんでいた。あすこの高原は、一めんにカラマツの林が続いている。仕事のあいだには、そのカラマツ林のあいだの細い道を歩いて、思いにふける。『一すじの道、ほのかなり、冬木立』その頃、そうゆう俳句を作ったが、それは、すぐに私自身の心持だった」と。タカクラには作家として生きていく一本の道が見えはじめていた。

四月には戯曲集『海峡の秋』（アルス）が、六月には恩師山口茂一との交流をペーソスあふれるタッチで描いた長編小説『蒼空』（アルス）が出版された。その直後の六月九日、軽井沢の別荘で有島武郎が雑誌記者の波多野秋子と心中した。有島とは、タカクラよりも妻の津宇の方が親しく、津宇は脳貧血で倒れた。

タカクラは、心中した遺体が片づいた翌日に有島の別荘を訪ねたが、「石灰酸で浴びせるやうに消毒してあるにも拘らず、尚堪へがたい異臭が家の遙かに外まで漂つてゐた」。「帰途についてからも、その不快な異臭がどうしても僕の体から抜けなかつた」が、「その時、すぐ向うの森のなかで悠然と啼く郭公の声がした。思はず僕は腸の底から洗ひ清められたやうな気持がした。生きてゐるといふ事の愉快さをその時つくづく味はつたやうに思つた」[18]という。そして、タカクラは、「有島武郎はバカだ！」、そう口に出して、言った。[19]

有島の死に、観念的な知識人の限界をみたに違いない。とはいえ、タカクラ自身、孤独な自己追求によって、生活的な理想主義の途をさぐる格闘のさなかにあった。

四　自由大学の指導者として

長野県上田・小県地域の青年たちの学習の場として始まった自由大学運動は、その後、長野県の飯田町、松本市、新潟県の堀之内町、伊米ヶ崎村、群馬県の前橋市など各地に波及していった。一九二四年八月には各地の自由大学の連絡機関として自由大学協会が上田につくられ、二五年一月からは機関誌『自由大学雑誌』が刊行された。

自由大学の指導者であった土田杏村は、病気の悪化のため、一九二二年二月の上田自由大学での講義を最後に出講できなくなり、その土田にかわって大きな役割を果たすようになったのがタカクラであっ

た。

一九二三年九月一日に発生した関東大震災は、タカクラにも大きな打撃を与えた。タカクラは長野にいて無事であったが、妻の津宇は身重で、社会的混乱のなかで食糧も手に入らなかった。しかも出版社のアルスが被害を受けたことはタカクラにとって死活問題であった。新潟県の自由大学の運営者の一人、渡辺泰亮に宛てた手紙には、「御手紙難有存じました。丁度東京附近に居られながら別状なかったのは何よりの御幸運でした。土田も著書一冊分の原稿そっくり焼いた上に原稿のさばけ口を失って弱ってをります。病中では有りさぞ困ってゐるだらうと全く同情にたへません。小生も関係ある者皆無事でしたが、唯だ唯一の米櫃アルスを焼いて了ったものですから直ちに生活に困却して了ひました。だがこれはいかにも大きなノアの洪水だと言ふ気がして却って突然心の引きしまる気持ちがしてゐます」[20]と、書き送っている。

タカクラは、九月に長女信が生まれると、十月には上田市郊外の別所温泉にある古刹の一つ、常楽寺の離れ「友月庵」に移住した。その離れは、自由大学の関係者が住職の半田孝海に頼んで借りたものであった。[21] タカクラは、生まれたばかりの子どもに与えるミルクさえ事欠く有様であったが、ここで、創作活動に打ち込むかたわら、自由大学へ出講したり、付近の青年団等からの依頼で講演に出かけたりして、過ごすようになった。

タカクラが土田杏村に宛てた手紙には、当時の生活の苦しさや創作に打ち込む心情が綴られている。たとえば、「御手紙難有う。読売や女性の件、例のとほりで近頃では却ってその度に微笑を禁じ得なくなった。（特に女性の巻頭言は就中面白かった）が雑誌といふものは厭やなもので、どうかしてもう少し本

が売れて呉れて生活が大体それでやって行けるなら将来原稿を直ぐにアルスに渡して行きたいものだと思ってる。自由大学は十二月一日からドストイエフスキイをやる事にした。ここは景色が素的に好い。家も僕などには勿体ない。住職は文学士で人の好い人だし、暫くたてこもって長篇（「阪」…「蒼空」の続編、僕の京都の生活のざんげろく）を書き上げて了ふ」[22]。また、別の手紙では、「粉ミルク難有う。助かった。（中略）／いま自由大学のドストイエフスキイのノオトを作ってる。この機会に作品全部日本訳で読み返してすっかり伝記を直して了ったので大変だった。しかし大きな勉強になった。殊に貧乏な時ドストイエフスキイは薬りだ。／僕のこといろいろ御配慮難有う。いつもながら申わけなし。併し今のところ全くどうにもならぬ。他に道を捜すとしても実際さがしやうがない位置に有るのだ。為方が無い行く所まで行かう。作品は旨く行ってる。苦しみ苦しみぢりぢりやってる。これが力だ。たった一つの救ひの力だ。もう誰一人読んで呉れなくても好いものだと言ふことが書きながら分かる」[23]と、書き送っている。

タカクラは、別所温泉に落ち着くと、自由大学運動にも積極的に関わっていった。たんに講師として出講するだけでなく、京都にいる土田とともに自由大学の運営について助言を与えたり、自由大学の組織化に協力したりした。いわば自由大学の「内輪」の人間として関わっていったのである。[24]

十一月上旬に長野県下伊那郡上郷村の横田憲治らが自由大学の設立のために上田に来た際には、山越脩蔵やタカクラが応対し、助言を与えている。[25] そして、信南（のち伊那）自由大学が開講してまもなく、一九二四年三月に下伊那地域の社会主義青年運動への弾圧事件であるＬＹＬ検挙事件が起こり、自由大学の運営者である横田憲治・平沢桂二が取り調べを受けると、「御手紙拝見しました。自由大学の件こ

れから我我も出来るだけの援助をしますから、これから一つ更に基礎を置き直して下さい。正直の所を言ふとこれまではまだ随分有閑気分と講習会気分とが有りましたから、これは却って本当に自由大学の使命を見出す大きな動機になるであらうと思ふのです。講師の謝礼などは僕と土田とで引きうけますから諸兄の方の、力をしっかりしめて下さい。今度こそはこれが弛むと直ぐにつぶれて了ひます」[26]と、横田に書き送っている。

また、新潟県に設立された八海自由大学の運営にも協力し、講師の斡旋や運営への助言を行っている。たとえば、次回の講師について、土田杏村に宛てて「そちらに誰か無いか。なる可く赤くない手頃の人は無いかね。全く弱った。殊に僕は渡辺君がああして努力してゐるのだから何とか都合をつけてやりたい。どうかそちらでも一つ骨を折ってくれ」[27]と、講師の斡旋を依頼している。また、隣接する狭い地域に自由大学が並立することから講座の持ち方について、渡辺泰亮に宛てて「夏期大学の方も出来るなら一緒にして、秋から春にかけての連続式にして、そして八海、魚沼、河口(ママ)を一緒にしてどこか河口(ママ)あたりの比較的便利な場所へ永久の会場地を極めてそして魚沼自由大学といふ名にして（上田のも今度信濃自由大学をよして上田自由大学、飯田のも伊那自由大学と平易に改めて貰いました）一つ堅実にやった方がよくは有りませんか、御相談申します」[28]と、書き送っている。

一九二四年八月に各地の自由大学の連絡機関として自由大学協会が設立されるが、その準備会は別所温泉のタカクラ宅で開催されており、土田にかわって指導・助言にあたった。また、二五年一月に機関誌『自由大学雑誌』創刊号が発刊されると、山越に宛てて「自由大学雑誌評判がよくて何よりでした。二号はぐっと好いものにしたいと思てます。大兄も必ず御執筆願ひます。将来経営の方は猪坂兄に任せるとして、自由大学その物の根本方針に就ては主としてあなたにやって頂きたいものです」[29]と、書き送っている。

自由大学の理念については、主として土田が構築したが、タカクラもいくつか発言している。タカクラは、八海自由大学の発会式で祝辞を述べ、その中で、自分「自身を教育し成長させんとする所の已むを得ざる熱望」こそ、既存の公立大学が「徒らに唯だ学生に職業を与ふるのみの機関に堕しつつある」のに対して、「正に確然と自由大学存立の意義を植ゑつける所」のものであり、自由大学は学問・芸術を求める熱望を持った人々が自ら教育し成長をはかろうとする教育機関であることを説いている。[30]また、伊那自由大学が刊行したパンフレットのなかで、「今日の日本の大学」は「必ずしも真理を攻究する所ではない、学問の府ではない」、「大体に於て、今あるところの組織を元として生活に必要なる方法を授ける所、即ちブルジョワの教養機関、或は職業授産所と見て差支へない」と批判し、「真理に飢ゑたる魂に対して健全なる糧を齎らす可き機関が必要である」とし、「自由大学を斯くの如き性質のもので有らせたい」[31]と、述べている。タカクラは、既存の大学を批判しつつ、学問・芸術を求める熱望をもった青年たちに応える教育機関として自由大学を構想したのである。

五　思想形成――『我等いかに生く可きか』『生命律とは何ぞや』を通して――

タカクラは、自らの生活に不安と動揺を抱きながら自由大学に関わっていたが、自由大学その他で講

演した内容をまとめた一九二三年の『我等いかに生く可きか』（アルス）、一九二六年の『生命律とは何ぞや』（アルス）を通して、その思想形成をたどってみよう。

「我我はもはや祈る事は出来ない。なぜと言ふのに祈る可きものが無いので有る。祈る可き神は科学が我我の手から取り上げて居る」。タカクラは、近代文学の成立に多大な影響を与えたダーウィンの『種の起源』の内容を紹介しながら、近代の作家が等しく陥った「デカダン」「世紀末」といった精神状況を説明する。そして次のように述べる。「科学的精神」にもとづいた「人世観からして我我のこの人世を眺め、これを捉へて有るがままに描き出さうとするさう言ふ態度の文学」が「自然主義の文学」であり、ゾラによってその理論の基礎が固められた。しかし、「その作品は余りに科学的に傾いた結果として唯だ知識や理性で物を知つて来て書いたもの」で、「非常に無味乾燥」なものになってしまった。それを克服するために「露西亜の文学」が入ってきた。日本では武者小路実篤が「新しき村のパンフレットの中で我我の死ぬと言ふことは神への凱旋と言ふことで有ると言ふ意味のことを言つて」いるが、我々が「神を失つたと言ふことは同時に完全に生活の目標を失つて了つたと言ふことに他ならない」のであって、彼らにとっては「一体我我はどう生きたら好いのだらうかと言ふやうな迷ひはなからう」と述べ、武者小路や倉田百三の書くものは「総て一つの頌歌だ」と断ずる。ここには、タカクラの文学史理解と自身の創作態度が暗示されている。そして近代の作家が等しく陥った苦悩を厳しく見つめ、ここに自身が研究してきたロシア文学の潮流を対置する。

タカクラは、そのうえで「近代の文学とは神を失つた者の宗教で有る。ニヒリストの宗教で有る。或は科学の洗礼を受けた所の宗教と言つても好い」と述べ、そして、「近代人の芸術」は「唯だ在るがまま

の人世を在るがままに眺めてそして在るがままに描き出さうと言ふ態度」において「寧ろ一つの科学」であって、しかも「やり方はむかし宗教がやつたと同じやり方で、人世の本体或は人間の本質を捉へようとする」ものだ、と述べる。しかし、透徹された近代の科学的所産を前に、作家は「限り無き孤独寂寥へ。底の知れない人世の寂寥」に導かれるとする。

それでは、このような「孤独寂寥」、いわゆる近代的苦悩を抱えた作家、ひいては芸術家が担うところの芸術とはどのようなものか。タカクラは「現代の芸術」は「苦の意識」を根底に持ち、「総ての文学は単に唯だ深く人世を知る、真の人間を捉へると言ふ所から出発する」、と述べ、その芸術は、「『在ること』そのことが持つて居るところの『真実』」または「『生活すること』そのことから生まれるところの『真実』（中略）のみを唯一のより所として」生まれてくるものだ、と述べる。そして、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストイエフスキー、チェーホフ等の代表的ロシア文学者の作品や、モーパッサン、ゾラ等のフランス自然主義文学などの作品を例にあげて説明する。

次に高揚しつつあった社会運動に対しては、タカクラはどのような見方をしていたのか。「私は自分では携つて居ないけれども唯今の社会運動と言ふものに非常に同情を持ち、また真実なる要求からその運動に携つて居る人達に対して満腔の尊敬を払ふ者で有ります」。タカクラは、そのように述べ、さらに「唯今の社会運動と言ふのは一口に言へば現在の社会の不合理を発見してそれをより合理的なものにしようとする運動だと言ふことが出来る」としつつも、「まだ我我の心を完全に捉へて呉れない何物かが有る」とする。それは、「社会問題で取り扱つて居る問題」は「社会人」または「経済人」という「人間の一つの属性の立場から人間の生活を見た見方で有る」が、「決してそれが人間生活の全部でも無ければ最

高のものでも無い」からだ、という。

このようにタカクラ自身が社会運動への関わりを問うとき、芸術家としての社会的立場をどのように説明しているのか。タカクラは、ドストイエフスキーの「悪霊」を例にあげて、「徹底エゴイストの当然持つ可き徹底ニヒリストの態度」を示すとし、芸術家は社会に対して「何等か有形無形の生産即ち或る『価値』を生み出すことも有りますけれども、併しそれは偶然で有つて決して目的ではない」。それゆえ「芸術家とは唯だ極端なるエゴイスト」であって「いかなる社会が生まれてももはやそれを踏み躙る」「永遠の反逆者」であり、「芸術家は社会の寄食者」「衆団生活の乞食」である。「所詮、芸術とは絶対に職業になり得ないもの」とされる。[32] ここには、まだ作家として自立できずにあえいでいるタカクラの苦悩が刻み込まれている。

この『我等いかに生く可きか』で述べられている芸術観や社会観は、『生命律とは何ぞや』になると、タカクラの認識に深化が見られる。

タカクラは、芸術は、鼓動する心臓の「生命のリズム、生命律を唯一の基調として生まれたもの」で、これが基礎になって舞踊、音楽、文学が派生したとする。だからこそ逆に、「真の芸術は、常にこの我我の生命そのものの上に非常に深い暗示を投げ」かけ得る、と述べる。そして、「生命力」を探求する目は、日常生活の規範から、社会問題へも向けられていく。「我我がかうして生きてゐるといふことは、決して単に個人が個人として生きてゐるのでなく、社会全体、或るいは広く人類全体といふものと非常に複雑な関係を持して、そこで初めてやつと人間としての生存を続けて行くことが出来るのだ」。タカクラは、こう述べたうえで、三度の食事も、田畑を耕す鍬や鋤にしても、百姓や鍛冶屋、鉱夫などの骨

折りに負っている、こういう「無数の人人の力を借りて初めて我我はこの世に生きて行くことが出来る」とし、「これまでは余りに個人といふものを重く見過して来た」と批判する。そして、「社会主義者の言葉を仮りて言ふならば、在来の歴史は悉く唯だ支配をする少数階級の歴史であつた」。人類の世界にとって「重要なのは唯だその何万年もの昔から黙黙として生産を続けて来た極めて愚かな大多数の人間」なのである。最近になって「歴史といふもの」は「この人類の最も重要な階級である百姓のはうの歴史でなくてはならないと言ふことになつて来た。つまりそれがいま最も大きく世界を動かしてゐる例の社会問題といふものに他ならない」、と述べる。タカクラは、「民衆」の存在を認識するようになったが、このことは芸術家とは「永遠の反逆者」であるとしていた見方から、「芸術とは英雄偉人でないところの我我凡俗がかくして已むを得なくなつて皆で一緒に踊る踊だ」という見方へ変化することにもみられる。

科学文明や都会文明の発展は、農村青年たちの多くを反都会文明意識に駆りたてたが、タカクラの場合はどうであったか。タカクラは、「巨大な煙突の林立する奇怪な姿」や「大建築のあひだを電車や自動車の疾走する有様」を見ると、「思はず我我も何とも言へない気持に襲はれ」「機械文明の怖ろしさに戦慄する」、と述べる。「それが極端になつて、中には根底からこの科学文明といふものを詛ふやうな人さへ出て」きているが、「私は決してさうではないと思ふ」。「畢竟人類全体の生活とか、或は人間本来の性質とかいふものは、決してさう根本から変つてしまふものではない。」「それよりも何十倍か重要な変化をこの科学文明が人類の世界に持ち来した。即ち、人類全体を打して一丸となすと言ふ、最も重要な事柄である」[33]と。タカクラは、アカデミズムに失望し京大嘱託をやめたが、そのアカデミズムから摂取した合理的精神が、科学文明に対する安易な否定につながらない理解を導いたといえる。

タカクラは、この時期、「人類有機体」説に到達する。「いかなる人間と雖も決して単に一人だけで生きてゐると言ふことは無い。全人類の一因子として初めてその生存を保つことが出来るのである。だから、言葉を換へて言はば、人類そのものが畢竟一個の有機体に他ならない」と。そして「生命律」「愛」といった生命観をてこに、「人類全体は互に相助け合ひ、互に生かし合つて」いく「人類共存共栄」の理想社会を求める社会観を提示した。[34]

この間、タカクラは、旺盛な創作活動を行い、一九二四年には短編集『かうして嬰児がこの世へ生まれた』（アルス）、戯曲集『長谷川一家』（アルス）、二六年には嘱託時代の大学生活を描いた自伝的長編小説『阪』（アルス）を出版した。そして二八年には、「インテリゲンチアとは何か」を『都新聞』（一九二八年六月十八日～二十日）に連載し、作家としての姿勢を明らかにしている。この文章の中でタカクラは、ロシアにおけるインテリゲンチアの語義を「一般民衆に先だつて或る新しき自覚を有ち、その自覚からして大衆を指導し社会の改革を行はうとした人々」、すなわち「社会革命家の異名に外ならぬ」とし、「今の日本の文学者などが仮にも自分達もインテリゲンチアの一人のやうな気になつたら、それこそ身の程知らずも極まれりと言ふものである」と断じる。そして、「真のインテリゲンチアと一見甚だ相似て実は根底から異なつて居る者」に「無用の人」がいる、という。「無用の人」とは「革命の意義をも明確に知つて居るのだが、然し全く何等の実行力をも有せず、徒らに唯口舌の徒であつて、口を開けば滔滔と革命を論ずるけれども、実際は社会に全く何の用をも為さない」人のことである。「古くはプウシキン、レルモントフから近くチエエホフ（ママ）に至るまで、露西亜の文学に最も多く取り扱はれて居るのは」「無用の人」である。それゆえ「露西亜の文学と言ふのはこの『無用の人』を借て当時の時代を描き出した時世

粧の連続であると言ふも過言でない」。こうした「無用の人」の陥る厭世観は「ブルジョワジイの病気に他ならぬ」とし、それは「有島武郎の情死にも芥川龍之介の自殺にも」「かう言ふ『無用なる』有閑階級が遂に自分の生命まで軽んずるに至る経路は明明に観取する事が出来る」とする。ここには、ロシア文学研究から導かれた透徹した論理が展開されている。そのうえにタカクラ自身の生き方とも関わらせて、有閑階級としてのインテリゲンチアとの断絶が表明されている。

それとともに、このころからタカクラは、自分の作品が「都会のインテリに読まれ」て、タカクラが親しくしている「労働者や農民にわ、ほんのわずかしか、読まれなかった」こと、小林多喜二の『蟹工船』や『不在地主』、徳永直の『太陽のない街』などのプロレタリア文学の作品も、「左翼運動の指導者」には読まれたが、一般大衆のあいだでは「わずかしか読まれ」ず「したしまれなかった」ことに気づくようになる。その理由について、「わたしの作品にも、コバヤシやトクナガの作品にも、同じよーに、これらの大衆の知らない文字がひじょーに多い。（中略）ことばも、聞いたことのないことばが、たくさんでてくる。だから、読むのに、何とも骨がおれ、どーにもしたしめない。（中略）大衆にわ、むつかしくて、とても読みきれない。それわ、文字やことばだけでない。すじの運びから、考え方から、感じ方から、すべて、そーいうちがいがある。（中略）文字やことばが、わずかのインテリの特権となっているものであることお、わたしわ、この時に、知った」[35]と、タカクラは述べる。この経験から、のちに日本語と文学の改革の問題に発言していくことになる。

六　農民運動への参加

五年間に及ぶ講座を開講してきた上田自由大学は、一九二六年三月に中断のやむなきにいたる。聴講者の減少にともなう財政難、青年たちの学習要求と講義内容の乖離、講師陣の渡欧留学による講師難、山越脩蔵の離脱などが要因であった。その後、二八年三月に山越や猪坂にかわって小県郡聯合青年団幹部の堀込義雄・山浦国久らによって自由大学が再建される。[36]

この間、タカクラは、常楽寺夕月庵から古平家、そして柏屋別荘主人の斎藤房雄の厚意で建てられた思温荘に住居を移す。タカクラの家には自由大学に参加した青年たちや周辺の農民たちが集まった。「一年分の小作料を支払うと、たちまち家族の食料がなくなる、貧農小作人が、当時、わたしを取りまいていた。いやでも、わたしは、農業の問題に新しい目を向けないわけにはいかなかった」[37]と、回想しているが、その中でタカクラは、千葉県内務部編『大原幽学』によって、上田に滞在したことのある大原幽学を知り、農村共同組合こそが農村改造の道であると考えるようになる。幽学研究の成果は、二七年、信濃毎日新聞に「大原幽学のこと—思温荘雑話—」（『信濃毎日新聞』一九二七年一月七日～十五日）として九回にわたって連載される。そこでは、幽学は「至誠勤労を主義として一郷一党の上に及ぼしたる影響に至つては決して中江藤樹や二宮尊徳に劣るものでな」く、「先祖株積立といひ共同購入といひ、或は耕地整理といひ、正条植二毛作といひ、孰れも日本農政史の上に特筆すべきかれの創業である」と評

価している。そして、タカクラが関係していた別所村の隣村、浦里村の越戸共同経営組合にふれて、「私が今この一文を草してゐる別所温泉の寓居から最近共同経営で有名になった例の浦里村の越戸へはたゞ小さな坂一つをへだつるのみであるが、その共同経営或ひは消費組合といふのは実にかれ幽学がその濫觴であつて、ドイツに於ける信用消費組合の始祖ジュルテエデリッツに先んずること十余年、ライファイゼンよりは二十五年はやく、また英領マンチェスタアのロクヂェル消費組合の生るゝ数年前にすでに幽学がこれを唱道実行してゐるのである」[38]、と述べている。

一九二六年三月に農家二三戸で共同経営を開始した越戸共同経営組合は、各組合員が耕地を提供し、農作業を共同耕作で行い、耕地と労働力の提供に応じて収入を配分するもので、共同経営によって農業生産力を高め、農民の生活を向上させようとする試みであった。しかし、地主—小作関係を温存したまま労働生産性を高めることにのみ力点をおいた同組合は、すぐに行き詰まりをみせることになる。[39]しかし、タカクラは、のちに「農村共同組合の提唱」（『中央公論』一九三九年五月号）において、この越戸共同経営組合の経験をもとに、農業生産を発展させる最も大きな手段になるものとして農村共同組合の組織化を提唱していくことになる。

ところで、タカクラは、地主—小作関係を温存した共同経営に現れた諸矛盾の要素を見抜いていた。同じ面積の耕地に対して、地主・自作農は一〇〇の収入があるが、小作農は一〇〇を受け取っても、地主に小作料を支払うと四四しか残らない、また、農業日雇い・季節労働者の賃金は繁忙期には公定賃金以上の収入があるが、共同経営組合では公定賃金しか支払われない、という点である。[40]このことがもとになって小作農・日雇いを中心に二八年、浦里村に農民組合が結成される。タカクラからすれば、共

同経営組合の理念を真に実現するために農民組合の結成を期し、越戸を中心とした農民たちを指導したともいえる。

上小農民組合連合会が結成されたのは、それから間もない二八年四月のことであった。浦里農民組合もこれに加盟して活発に運動を展開した。タカクラは、上小農連の発会式で「耕す者は永遠である」という題で講演しているが、その中で、「この『永遠の生産者』であるところの農民が先づ己が人類の社会に有つところの真の位置に自覚して、当然農民が有つ可き権利を農民の手から奪ひ取つて居るところのかの一部特権階級の手から再びそれを農民の手に奪ひ返さなくてはならないのであります。（中略）而して農民が斯の如き力をもち得る途は只一つしか無い。即ち農民自身が団結する事である」[41]と、農民の団結を説いている。

上小農連は、タカクラの指導のもとに、二九年四月の村会議員選挙で公認候補を各村で当選させて政治進出を図るとともに、納税延期・農会廃止・借金支払延期・金利質屋利子引下げなどの要求を掲げた不況対策運動を活発に展開した。そして、三〇年十一月には全国農民組合全国会議派上小地区委員会となり、長野県内最左翼の農民組合運動を展開していった。

七　「文学論」から「日本民族史」へ

タカクラは、農村生活に根をおろし、深刻化する農村不況を目の当たりにして、活動の重心を自由大学運動から農民組合運動に移していった。とともに、自由大学での講義内容も「文学論」から「日本文学研究」「日本民族史」へと変化する。タカクラは、次のように回想している。

> わたしは、ロシア文学・フランス文学・イタリア文学などの代表的な作者の作品を　具体的に紹介して、文学ぜんたいにたいするみとおしをそれらの勤労者にもってもらおうと思って、始めました。ところが、そうしてやっていくうちに、それらにたいする会員たちの驚くような熱意に、すっかり圧倒されると同時に、会員たちは別のもっと熱烈な要求をもっていることを、わたし自身がひしひしと感じないわけにはいかなくなりました。[42]

タカクラは、一九二八年十二月と翌二九年十二月に伊那自由大学で「日本民族史」を講義する。二八年の講義では、「特に古代民族史は一般に等閑に附されてゐる。普通教育に於ても、大学に於ても研究されていない」とし、「日本人はいかなる人種であり、古代民族は如何なる生活を行ってゐたか。人種学上（科学上の）黄、白人種の分類は誤ってゐる。之は非科学的である」「之は言語学によって決定しなければならぬ」「言語学上殊に文法（＝単語）が最も正確にその人種による差異を認めうる」と述べたうえで、世界の語族を五分類し、日本語の話へ入っていく。[43]

二九年の講義では、「従来の歴史は真の歴史ではなかった。一部の階級の歴史であった。即ち政権を握った人々の歴史であった」「吾々は自らの真の歴史をさがさねばならない」という言葉で始まり、「文明文化が進むに従って有力なる階級が生まれて農民を支配するに至った」とし、権力が寺院から貴族、武士、

商人、資本家へと推移したことが話される。そして、講義の後半では、農村不況下の地域の現実を上小農連の調査資料をもとに具体的数字をあげて説明を加えたあと、農民が「歴史には始めから表れなかったのは財力を有しない被支配階級であり、苦しい階級であったからである。然らば此の階級は如何にして人間的解放の道を探すか。それは農民同盟に他なし」という言葉で結んでいる。[44]

タカクラは、農民たちの要求を感じ取り、それに応えるかたちで自由大学の講義内容を組み替えていったことが知られる。

農業恐慌の深刻化と生活難は自由大学の継続を困難にし、上田自由大学は三〇年一月に終焉を余儀なくされる。その後、タカクラは、三〇年には西塩田村小作争議に関わり、三二年まで二年間に及ぶ激しい闘争を指導して組合側を勝利にみちびいた。その間、二七年に「勤労（生産）から完全に浮きあがった階層（いわゆる「上流階級」）のくさりはてた生活」を描いた長編「高瀬川」を、三〇年には「当時の農民のじつにひどい生活と、その出身の女工の、たたかう方法を知らない所からくる、この上なくみじめな悲劇」を描いた「百姓の唄」を、三二年には「実際に階級闘争をやっている労働者・農民の新しいひどさと苦しさと、しかし、そこに始めてさしている新しい希望」を描いた長編「狼」を『都新聞』に連載した。[45]「それらを書きつづけるあいだに、わたしの思想が大きく変った」[46]と、タカクラは回想しているが、二九年の山本宣治の死を契機にマルクス主義者への傾斜を強めていった。そして「北信左翼論壇の暁将」[47]として官憲当局の厳しい監視を受けたが、そのタカクラの活動を支えたのは、この地域の農民・青年たちであった。

おわりに

タカクラの文学作品について、神山彰一は、「『女人焚殺』におさめられている処女作的な戯曲を出発点として、『蒼空』『阪』にいたる初期の作品は、日本インテリゲンチャの伝統をふんで、しかしきわめて先駆的に、色濃く、苦悩のかげを刻んでいた。だが、『百姓のうた』『狼』のころから、タカクラは、民衆の苦悩をこそ自らの苦悩とする道に、歩み入った」[48]、と述べている。この作品内容の変化は、作家として生きていこうとしたタカクラが、土田杏村の誘いで自由大学に出講したことが機縁で長野県に移住することになったこと、また、芥川龍之介・菊池寛らの働きかけにより文壇からボイコットされたことが、大きな要因となっており、その後のタカクラの生き方や思想的立場を変えることにもなった。長野県に移住し、創作活動と自由大学の指導にあたるかたわら、自由大学の青年たちや周辺の農民たちと交わり生活する中で、また、文壇からのボイコットにより、当時のインテリゲンチャアの生活から離れる中で、芸術家とは社会の「永遠の反逆者」であり「社会の寄食者」という自己認識、「近代的ニヒリズム」を克服していく。そして、「民衆」の存在を認識するようになり、有閑階級としてのインテリゲンチアからの断絶を表明するようになる。

タカクラは、農村生活に根をおろし、深刻化する農村不況を目の当たりにして、活動の重心を自由大学から農民運動に移していく。とともに、自由大学での講義内容も「文学論」から「日本民族史」へと

変化していった。農民たちの願いや悲しみを受けとめ、ともに生き抜く中で、タカクラは自己変革をとげていった。「多くの共産主義者、とくにインテリ出の共産主義者が、思想をとらえるところから出発して、運動にはいったのに反して、私は運動にはいって、それから、共産主義の思想をえた」[49]というタカクラの言葉は、そのことを示している。

タカクラは、有島武郎や芥川龍之介と同時代を呼吸しながら、かれらに対して独自の批判的立場をとるようになり、まさに「民衆の中へ」その歩みを進めた作家・知識人となった。それが、タカクラの一九二〇年代であった。

(1) 自由大学運動については多くの論考がある。拙稿「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動」(『季刊現代史』第八号、一九七六年)などを参照。また、タカクラと自由大学との関係を検討したものに、米山光儀「上田自由大学の理念と現実—タカクラ・テルの教育的営為—」(慶應義塾大学大学院『社会学研究科紀要』第二一号、一九八一年)などがある。

(2) 安田常雄『日本ファシズムと民衆運動』(れんが書房新社、一九七九年)。上小農民運動史刊行会『長野県上小地方農民運動史』(同会、一九八五年)など。

(3) 魚津郁夫「ある大衆運動家—タカクラ・テル—」(『共同研究転向』上巻、平凡社、一九五九年)。道場親信「戦時下の国民文学論—タカクラ・テルの文学・言語理論を中心に—」(『レヴィジオン』第二輯、一九九九年)。拙稿「戦時下知識人の思想と行動—タカクラ・テルの場合—」(『法学新報』第一〇九巻第一・二号、二〇〇二年)。

(4) 信濃自由大学発起者宛高倉輝書簡(一九二一年九月十三日付)。

(5) 猪坂直一「上田自由大学の回顧(六)」(『自由大学雑誌』第一巻第七号、一九二五年)。

(6) 筆者・天田邦子編「青木猪一郎日記」(一九二二年十二月七日条、『自由大学研究』第四号、一九七五年)。

(7) 猪坂直一『回想・枯れた二枝』(上田市民文化懇話会、一九六七年)。

(8) 筆者作成「自由大学講座一覧」(自由大学研究会編『自由大学と現代』、信州白樺社、一九八三年)。

(9) 土田杏村「『女人焚殺』」(『女人焚殺』付録、一九二二年)一〜二頁。

(10) 高倉輝「著者より読者へ」(『女人焚殺』付録、一九二二年)八頁。

(11) 山越脩蔵宛高倉輝書簡(一九二二年[ ]月二十六日付)。

(12) 山越脩蔵宛高倉輝書簡(一九二二年[ ]月五日付、『信州白樺』第三〇号、一九七八年、所引)。

(13) タカクラ・ツウ「自伝草稿」(一九五五年)七五〜七六頁。松木貞夫『本屋一代記』(筑摩書房、一九八六年)。

(14) タカクラ・ツウ「自伝草稿」(前掲)一七二〜一七四頁。

(15) タカクラ・テル「人生問題から社会問題へのナヤミへ」(『前衛』一九七〇年二月号)一六七頁。高倉太郎「父と子の最後の対話」(『衣笠』第六号、一九八七年)二〇四〜二〇七頁。

(16) 土田杏村宛高倉輝書簡(一九二三年一月二十三日付)。

(17) 高倉テル「カッコー」(『ミソ・クソ・その他』厚生閣、一九三九年)五四〜五五頁。

(18) 高倉輝「郭公(二)」(『都新聞』一九三五年五月十九日付)。

(19) 高倉テル「カッコー」(前掲)六〇頁。なお、本文のもとになった「郭公」(『都新聞』)には「有島武郎はバカだ!」の文言は入っていない。

(20) 渡辺泰亮宛高倉輝書簡(一九二三年九月十八日付)。

(21) 倉沢美穂『別所温泉の高倉テルさん』(倉沢美穂遺稿刊行会、一九八七年)五六〜五八頁。

(22) 土田杏村宛高倉輝書簡(一九二三年十月二十三日付)。

(23) 土田杏村宛高倉輝書簡（一九二三年十一月二十八日付）。
(24) 上木敏郎『土田杏村と自由大学運動』（誠文堂新光社、一九八二年）一一八頁。
(25) 横田憲治宛山越脩蔵書簡（一九二三年十一月九日付）。
(26) 横田憲治宛高倉輝書簡（一九二四年三月二十八日付）。
(27) 土田杏村宛高倉輝書簡（一九二四年二月九日付）。
(28) 渡辺泰亮宛高倉輝書簡（一九二四年二月十二日付）。
(29) 山越脩蔵宛高倉輝書簡（一九二五年一月二十二日付）。
(30) 高倉輝「発会式に臨みて」（渡辺泰亮宛高倉輝書簡［一九二三年十二月四日付］）。
(31) 高倉輝「自由大学に就て」『自由大学とは何か』（一九二四年）。
(32) 高倉輝『我等いかに生く可きか』（アルス、一九二三年）八一～二〇八頁。
(33) 高倉輝『生命律とは何ぞや』（アルス、一九二六年）三～一〇六頁。
(34) 同前書五八～七一頁。
(35) タカクラ・テル「わたしのあるいてきた道」（『人民文学』一九五一年五月号）四二～四三頁。
(36) 再建された上田自由大学については、拙稿「昭和恐慌と自由大学運動―上田自由大学を中心に―」（『長野県近代史研究』第六号、一九七五年）を参照。
(37) タカクラ・テル「自由大学がわたしを変えた」（『自由大学運動六〇周年記念誌』一九八一年）四頁。
(38) 高倉輝「大原幽学のこと（一）」（『信濃毎日新聞』一九二七年一月七日）。
(39) 上條宏之『民衆的近代の軌跡』（銀河書房、一九八一年）二九七～三二六頁。
(40) 高倉テル「農村共同組合の提唱」（『中央公論』一九三九年五月号）五二～五三頁。
(41) 高倉輝「耕す者は永遠である」（『伊那自由大学』第一号、一九二九年）一三頁。

(42) タカクラ・テル「自由大学かんけいの書簡集」（拙編書『伊那自由大学関係書簡』自由大学研究会、一九七三年）。
(43) 楯操・講義ノート『日本民族史』一九二八年。
(44) 楯操・講義ノート『日本民族史研究続講』一九二九年。
(45) タカクラ・テル『狼』（日本青年出版社、一九七一年）二四四頁。
(46) 同前、二四四頁。
(47) 「二・四事件ニ関スル概況」（長野県庁文書『昭和八年知事事務引継書』）。
(48) 神山彰一「解説」（『日本の封建制』［タカクラ・テル名作選］理論社、一九五三年）三三三頁。
(49) タカクラ・テル『文学論・人生論』［タカクラ・テル名作選］（理論社、一九五三年）八頁。